

特撮は貧乏から生まれた —円谷英二 ゴジラの覚醒—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

映画界最高の栄誉といわれるアカデミー賞で「ゴジラ-1.0」が視覚効果賞を受賞した。ゴジラファンを公言する山崎貴監督の特撮技術は昨年11月の公開から海外でも反響を呼んでいた。

実写版30作目と不滅の人気を誇るゴジラ映画の誕生は70年前に遡る。特殊撮影技術＝特撮を担当した円谷英二(1901—1970)はゴジラの生みの親として特撮の神様と呼ばれるようになった。

テレビに進出してからもウルトラQやウルトラマンを大ヒットさせ、全国的な怪獣ブームを巻き起こす。いまま脈々と受け継がれ、高度化され、世界を驚嘆させる特撮はいかなる現場で創造されたのか。特撮という言葉を生み出した円谷は頭が痛くなるほど考えて考えて考え抜いた。

パイロットから活動写真へ

円谷は現在の福島県須賀川市の商家で生まれた。幼くして母が病気で亡くなり、婿養子の父が離縁され、祖母によって育てられる。

水彩画を描くことを好む内向的な子供は日本初の飛行機の公式飛行に感銘を受け、パイロットに憧れる。尋常高等小学校では精巧な模型飛行機を自力で組み立て地元紙で紹介された。

卒業後、東京・羽田に新設された日本飛行学校に第一期生として入学する。高額の学費は幼い頃から可愛がってくれた叔父の一郎が工面した。

しかしパイロットになる夢は飛行中における教官の墜落死や東京湾に襲来した大型台風による

機体の流失であえなく頓挫する。同校は活動停止に陥り、円谷も退学を余儀なくされた。

失意のうちに神田の電機学校(東京電機大学)の夜間部に通う傍ら叔父の知人の玩具会社の嘱託考案係となる。「ないものは作ればい」と少年の頃から発明は得意だった。円谷は自動スケートと名づけた足踏みギア付きの三輪車や電池式で実際に通話できる玩具電話などのヒット商品を次々と開発し、多額の特許料を手にした。

特許料を学費に充て精神的な余裕もできた頃、たまたま映画関係者と知りあい、当時は活動写真と呼ばれていた映画のカメラマンを志す。天然色活動写真＝天活に入社し、天活が国際活映＝国活に吸収合併されると国活巢鴨撮影所で撮影助手として働いた。国活では誰も怖がって引き受けようとしなかった飛行機による空中撮影をやり遂げ、短期間でカメラマンに昇格する。

ところが1923年に発生した関東大震災で東京の撮影所は壊滅状態となり、各撮影所の京都移転に伴い円谷も23歳で京都に移り住む。松竹傘下の衣笠貞之助監督が設立した衣笠映画聯盟に所属



円谷英二とゴジラ

し、やがて松竹下加茂撮影所にカメラマンとして入社する。しかし従来とは異なる独自の撮影手法が社内や俳優から激しく反発され、セットもロケも照明もB級に格下げされるなど冷遇された。

原水爆軍拡競争の時代に

孤立した情況のなかでも円谷の姿勢は変わらなかった。給料の約半分を新たな撮影技術の研究に注ぎ込み、協力者たちに酒を奢る日々を過ごす。通常より少ないライトで撮影したフィルムは特殊現像で明るくし、粗末なセットの代わりに立派なミニチュアをつくって合成した。限られた予算のなかで発案された数々の創意工夫はのちに比類なき固有の特撮技術として開花する。

私生活では荒木マサノと結婚し、やがて3児の父親となった。研究資金と生活費の足しにしようと特殊現像技術を駆使した30分写真ボックスを大丸百貨店に売り込み、たちまち評判を呼ぶ。

他社から注目されるようになった円谷は日活太秦撮影所に引き抜かれる。同時期に公開されたアメリカ映画『キング・コング』に衝撃を受け、全フィルムを取り寄せて入念に研究した。

東宝映画株式会社が1937年に設立されると砧の東京撮影所に特殊技術課の課長として迎えられた。1941年に太平洋戦争が勃発し、東宝は軍部の要請で戦意高揚映画の制作を本格的に開始する。にわかの特撮の需要が高まり、円谷の率いる特技課が一手に仕切っていく。とりわけ翌年公開された『ハワイ・マレー沖海戦』は撮影中から真珠湾の特撮セットやミニチュア戦闘機によるリアルな空中戦が話題になり、皇族や軍幹部や著名人などが見学に押し寄せて大ヒットを記録した。

しかし敗戦後の1948年、軍国主義に加担したとしてGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)から公職追放処分を受け、重役陣らと東宝を去った。処分は4年後に解除されたものの、円谷は反省も弁解も含めて戦争責任に言及することはなかった。ただ特撮技術を徹底して極めていく映画づくりを通じて何かを語りつづけていたのかもしれない。

戦後世界は東西冷戦による核軍拡競争の時代を迎えていた。1954年3月にアメリカが太平洋のビキニ環礁で行った水爆実験で日本のマグロ漁船

第5福竜丸が被爆するという重大事件が起きる。

反戦・反核を旗印に原水爆禁止運動が高揚するなか11月に日本初の本格的怪獣映画『ゴジラ』が公開された。本多猪四郎監督と共に制作に臨んだ円谷は特撮班を編成して陣頭指揮を執る。

子供たちに夢を与えて

深海で生き延びた古代恐竜が水爆実験で覚醒し、全身に放射能を充満させた巨大怪獣となって首都・東京を破壊する。核戦争の脅威を象徴する『ゴジラ』は空前の大ヒットとなり、観客動員数約960万人と当時の総人口の1割以上が映画館に詰めかけた。その後も『モスラ』『キングコング対ゴジラ』『空の大怪獣ラドン』などの怪獣特撮映画を成功させ、円谷は全世界に名声を轟かす。

東宝の出資で新たに円谷特技プロダクションを設立して以降、本格的なテレビ特撮シリーズの準備を開始する。1966年1月からTBSで始まった『ウルトラQ』はユニークな怪獣キャラクターが人気を呼んで高視聴率を達成。さらに7月から放映された『ウルトラマン』が爆発的にヒットし、変身するヒーロードラマの原型を築いた。2年後、社名を円谷プロダクションに変更する。

晩年は静岡県伊東市の浮山別荘で妻と静養し、狭心症で68年の生涯の幕を下ろす。生前「特撮ってというのは貧乏の中から生まれたんだ」と語っていた円谷はあえて自分を失敗の許されない過酷な状況に追い込み、最高のアイデアを生み出していた。「『できますか?』と聞かれたら、とりあえず『できます』と答えちゃうんだよ。そのあとで頭が痛くなるくらい考え抜けば大抵のことはできてしまうものなんだ」と回想している。

映像表現については「子供たちに夢を与えても刺激を与えてはいかん」とスタッフを諭し、残酷な流血シーンはできるだけ避けていた。円谷は常に子供の視点に立って特撮の効果を考え、不安な気持ちにさせないことを心がけていた。

子供たちにサインを求められると自分の名前を図案化したイラストを描き、大人には「子供に夢を」と書き添えた。東北で怪獣ファンの児童が交通事故で亡くなったときは涙を流し、自家製のミニチュア怪獣を持参して仏前に供えた。